

Title	福澤諭吉傳(石河幹明著, 岩波書店發行)
Sub Title	
Author	占部, 百太郎(Urabe, Hyakutaro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1932
Jtitle	史学 Vol.11, No.3 (1932. 10) ,p.161(489)- 164(492)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19321000-0161

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

福澤諭吉傳

(石河幹明著)
岩波書店發行

傳記作者としては、いろいろの資格を必要とするが、殊にその傳せんとする人物に親炙してその爲人を熟知することが、最も大切な要件である。ボスウエルがジョンソン博士を傳し、モーレーがグラッドストーン傳を書いた如き、その好適例である。石河幹明氏は福澤先生の遺弟中、最も先生に親炙した人で、殊に先生の後半生に於ては、時事新報主筆として、恰も影の形に従ふが如く、始終先生に接近したのである。慶應義塾が福澤先生の傳記編纂の事業を企つるに方つて、石河氏を煩はすに至つたことは、洵に切つて填めた適任者を得たのであつた。

明治文明の大恩人福澤先生の傳記としては、坊間一二斷片的のものがないでもないが、信憑す可き傳記としては、明治三十二年刊行せられた一冊の『福翁自傳』があるだけである。併も同書は、先生がその經歷の概略をば、思ひ出づるままに談話せられたその筆記を時事新報に掲載せられたものであつて、固より完璧とは言ひ難いものである。先生は更に自から筆を執て、その遺漏を補ひ完全なる自傳を發行せんと企てられ、既にその腹案も成つてゐた

ある。乃で慶應義塾に於ては、故先生の遺志を紹いで、完全なる先生の傳記編纂を企て、石河氏にその事業を囑託した次第である。左れば『福翁自傳』が、今回發行せられた『福澤諭吉傳』の最も主要なる材料を成してゐることは當然である。

『福澤諭吉傳』は各冊約八百頁四冊四十八編から成る浩漭なる大著である。先づ著者の本傳記著作に對する態度は何うであつたか。著者は自序の一節に於て次の如く述べてゐる。

先生の事績は我國文明の發達に聯關交渉すること極めて緊密にして、其發達の跡を尋ねるにはこれを切離すことが出来ないものである。即ち先生の傳記は單に個人の傳記たるに止まらず、我文化史の上に重要な資料を供するものにして、其編纂事業の容易ならざる點も亦ここに存してゐる。世間の傳記には或は其人物の功績事業を頌贊するの意味を以て書かれたものなきにあらざるも、本傳記の編纂に就ては、事實ありの儘を記して、其記述には一切私見を挾まず、一々正確と認めたる資料を根據とし、成るべく詳細に先生の經歷言行の實相眞面目を直寫することに努め、これに對する評論解釋は世の讀者研究家の自由に付せんとするものである。云々

著者のこの態度は眞にその體を得たものである。西洋文明輸入の卒先者として、新日本建設の指導者として、將た又教育家新聞記者としての福澤先生を評論的に傳する者は、自から他にその人が在るであらう。廬山に在る者は廬山を見ずで、著者は先生の經歷言行を評論するには餘り先生に接近してゐたのである。併も評

論的傳記よりも敘述的傳記の方が、後の福澤傳を書く者にとつて便利であるのみならず、幕末から明治に互る歴史の研究者にとつても、却て精確なる史實を提供する所以であらう。

次に傳記の材料であるが、前述の如く、『福翁自傳』は先生の一生涯、殊にその青年時代の經歷の主要なる材料となつてゐる。而して、凡そ傳記の主要なる材料となるものは書翰であるが、殊に先生は筆まめに手紙を書かれたのだけれど、それらの書翰も、先生のお死去後多くの歲月を經過したので、湮滅したものが多く、殊に關東大震災火災の爲に一層消失したのである。而も著者は多大の困難を経て、出來得る限り先生の斷簡零墨を蒐輯して、これを利用したのである。次に嘗て慶應義塾圖書館に於て、親しく先生から教を受けた先輩の先生に關する談話を筆記して保存して置いたものがあつて、これ亦編纂上に資するところあつた。夫れから『福澤全集』は勿論の事、先生と交渉のあつた明治時代の人物の傳記書簡等亦多く材料に供せられてゐるのである。

夫れから編纂の體裁であるが、大體年次を逐ふて記述し、事項によつては、便宜の爲、事の始終顛末を一編の中に一括記載してゐる。例へば慶應義塾の如き先生が終身關係せられた事業の記述は編年體により、榎本武揚助命の運動の如き、長沼事件の如き、比較的短かい時期の間に落着した事件は一編中に纏められてゐる。

福澤先生は天保五年大阪堂島に産れ、明治廿二年東京三田に於て没せられた。その六十八年に互る期間は我日本の歴史中最も重要なチャプターに屬する。即ち封建制度は打倒せられて明治の

新政府が成立し、廢藩置縣、西南戰役、議會開設、日清戰役を經、帝國の世界に於ける地位が漸く確立せられつゝあつた時代である。新日本の建設に際して、我が福澤先生は舞臺に踊る役者でなくして、この大ドラマの作者若くは舞臺監督として活動せられたのである。従てその役割は軍人政治家の如く華々しいものはないが、西洋文化の輸入者として、教育家として、新聞記者として、その活動せられた領域は頗る多方面に互つてゐるのである。斯る多事なる時代に現はれたこの多角的人物の經歷言行を傳ずることは、普通の軍人政治家の傳記に於けるよりも寧ろ困難なる事業であらねばならぬ。著者がこの難事業に見事成功したのは、首に先生に最も多く親炙したのみならず、終始一貫時事新報主筆として明治文化の進運を評論する地位に立ちて、躬自からこの大ドラマの劇評家たる任務に當つてゐたからであらねばならぬ。

一々本文に就て月且すべく本書は餘りに浩瀚であるから、唯だ筆者が讀過した際、感じた二三のインプレッションを書くことにする。先づ第一に感じたのは、著者の研究が如何にも徹底的で、且その材料の取扱方の用意周到且懇切を極めたことである。本書は『福翁自傳』を最も主要なる材料に採つただけけれど、前にも述べた如く、同書は先生の記憶によつて筆記したものであるから、未だ語つて詳かならざる點がないでもない。著者は克明に各方面の材料を涉獵してその足らざるを補つてゐる。例へば、先生の先考百助氏の事に就て、『自傳』には單に三四行を記しただけに過ぎないが、本書には典型的武士で、漢學の造詣あり詩文の業にも長じた先考の經歷が、約十頁に互つて述べてある。左にその

一節を例示する。

百助は諱を威、號を少山、幼名を百平といひ、初め同藩の儒者野本雪巖に學んで才學頗る秀で藩中に其名が高かつた。早くから備後福山の碩儒菅茶山の學徳を慕ひこれに従遊したいといふ希望を抱いてゐたが家計不如意のためこれを果すことが出来なかつた。父兵左衛門もこれに就ては相當考慮したものと見えて、

中津藩廳の記録を見ると、文化十一年八月の條に、兵左衛門から百平備後へ遊學に付學資拜借の願が出たが前例がないから聞届けられなかつたとの記事がある。又右の記録には、其後百助が豊後日田の帆足萬里の門に學んだことや、「學文執心之趣」を以て藩費から父兵左衛門へ褒賞があつたことなども記されてある。百助は文政四年家督を相續し、元締方勘定人の役に就いてゐたが、翌五年御廻米方となつて大阪在勤を命ぜられ、爾後格式が次第に陞つて、供小姓格を経て厩方格まで進み、大阪在番の期限は數回繼續して前後十五年の久しきに及んだ。……(第一卷五頁)

次に感じたのは、著譯書の紹介の親切丁寧なることである。福澤先生は新日本の建設に就て、各方面に關係せられたけれど、畢生の心血を濺がれた最も主なる事業は、著譯を始め、新聞の記事論說等の文筆に關する業務であつた。だから、著譯事業自から關する記述が、『福澤諭吉傳』の大部分を占めてゐることは當然であらねばならぬ。著者は五十種にあまる先生の著譯書に就て、一々丁寧親切に説明を加へてゐるが、先生の代表作と認めらるる「文明論之概略」「西洋事情」「學問のすすめ」の三著は別にそれ／＼

獨立の一章を掲げて、詳細に解説してゐる。而して最もよく先生の主義思想を窺ひ知るに足るべき大著述である「文明論之概略」の如きは、約百十頁を費して、細密なるアウトラインを與へてゐる。だから、先生の主義思想を窺ひ知らんと欲して、直ちに原著を通讀する餘暇を有しない者にとつては、便利この上ないものである。

尙ほ一つ感じたことは、著者が先生の活動せられた時代、殊にその後半生の背景に通曉してゐることである。前にも一寸記した如く、著者は慶應義塾の業を卒へて爾後約四十年、常に時事新報主筆として、又或時は編輯長を兼ねて、時勢の進運を評論する地位に在つたから、先生が活躍せられた事業の背景は、恰も掌を指すが如く、これを展望するに好箇なる座席を占めてゐたのである。著者が時代の背景を敘する文章の生氣潑刺として、千里一瀉の概あるは洵にその故であらねばならぬ。日清戦争の勃發するや、熱心なる國權論者であつた福澤先生は、日本の勝利を誘ふべく官民の間に立ちて大に周旋せられたことは知る人ぞ知る。而して先生は時事新報に於て、極力戦時の日本を指導せられたのであつた。左れば「日清戦争」が本書の一章を占めてゐることは當然であらねばならぬ、著者が日清戦争の顛末を敘した文章は、一段の生彩と活氣とを加へてゐると思ふから、左にその一節を引く。

……かゝる始末にして我國の軍備が支那の勢力に壓せらるるに至らばますます其侮を招いて、必ず臍を嚙むの侮を遺すであらうと深く憂慮せられ、近くは眼前に迫れる軍備擴張の必要のため、遠くは數年後の國會を無事平穩の間に開くため、ますます

官民の調和を高調せられたけれども、政府は更に此點に留意することなく、たゞ民論の蠶壓に焦慮し、民論はこれに對してまず、反抗の勢を成し、官民共に閹墻の内争に没頭して、東洋政略の如きは復たこれを念頭に置く者なき有様であつた。かゝる間にも政府は四隣の形勢上我軍備の薄弱なる一點は流石に不安を感じながら、さりとて増税の決断は固より出来ないので、窮餘の窮策として明治二十年三月皇室から海防費の内へ内帑金三十萬圓を下賜されたのを機會とし、民間の富豪大家に海防費の獻金を勧誘し、其獻金者に位階を授くるが如き姑息の處置を執り、世間から位階賣買の譏を受けたのみで其効果は殆んど見るべきものがなかつた。かくの如き始末にして外交軍備共に退嬰消極何等の施設も見なかつた。其間に歲月勿々二十三年の國會開設となつたのである。……(第三卷六九四頁)

それから最後に書かねばならぬことは、著者が老境に入つた故を以て時事新報社を辭した後であつたにも拘らず、前後七箇年に互つたこの困難なる著作事業を引受けて、立派にこれを完成せしめたその旺盛なる氣力である。これ畢竟故師に對する報恩の一念に發起したものであることは言を俟たないが、一つはこの希れに見る偉人の業績を不朽に傳へて、明治文化の盛業に貢獻するところあるのみならず、後世萬人の師表を垂示せんとする希望に出でたものであらう。

以上はこの大著作のホンの一斑を傳ふるに過ぎない。併しながら、日本新文化の大恩人たる福澤先生のこの傳記が、先生の薰陶を受けた我等同窓に對して、非常なる興味と教訓とを與ふること

は勿論であるが、日本文化發達史の資料として、世間の史學研究家にとつても亦、容易に得べからざる参考書たることは、筆者の信じて疑はざるところである。併も著者の雄渾地麗にして暢達なるスタイルは、一般讀書家の讀物として、多大の薰化と興趣とを提供するであらう。(昭和七、九、三〇) (占部百太郎)

近代世界外交問題解説

(芦田均著)
(タイムス出版社版)

著者は「最近數ヶ月來の思想界には獨裁政治や武斷主義外交に關する議論が歡迎せられ、經濟界に於てさへ單位經濟萬能の思想から日滿抱合の形式が唯一の救濟策であるやうな主張が横溢してゐる。けれども世界に於てどれ程民族競争の格闘が尖鋭化したにしてもラヂオと飛行機の文明が距離を短縮して、吾人がそれを意識すると否とに拘らず、世界を一單位とする生活がしつかりと人の魂に喰ひ入つてゐる以上、所詮吾々の對照は常に六大洲であることを免れ得ない。亞細亞に立籠る主張を宣揚する者は尙海外の形勢の推移に飛耳張目しなければならぬ、聯盟を排撃するものは一層よく聯盟の心理を理解することが肝要である。」(はしがき二、三頁)と至當の主張をなし、「吾々が現在の世界より、よりよき生活に入る爲めには過去の史實を辿つてこゝに人類進歩の最善の航路を發見する外に途はない。私はこゝに過去十餘年の波瀾多き世界の動搖の跡を眺めて人生の航路に標識を打立てんとする人々の努力に、はかなき微力を致さんとする念願から歴史を讀む」(はしがき一頁)と。さうして本書は書かれたものである。